

三澤 健之 たけ ゆき 無我の境地で母を執刀、すい臓腫瘍手術のエキスパート

文 高橋 誠

Text by Mac Takahashi

・ 学校法人慈恵大学広報推進室長
・ 医療・健康コミュニケーター

Medicine Health 医療・健康分野のスーパーパイオニアたち

傲慢な性格だが、命に関わる手術で他の医師が難渋していると、お決まりのように手術室に現れ、類まれな高い技術で患者の命を救う手術成功率100%の天才外科医渡海を嵐・二宮和也が演じた『ブラックペアン』の第6話（5月27日放送）で、渡海は母・春江（倍賞美津子）の命



客員教授として招聘された米国ノースカロライナ大学での特別講演後、肝胆膵外科の教授、准教授ほか医局員に歓迎を受ける三澤医師（前列中央）。

を救うために、冷静な判断が難しいといわれる肉親のおべを成功させました。

東京慈恵会医科大学附属柏病院外科診療部長の三澤健之医師も、母親の難手術を執刀した外科医です。胃の裏側の深く危険な3か所にリンパ節転移しやすい臓がん。いつも通りの無我の境地でオベに臨み、無事成功しました。かつて生死に

関わる長時間大手術の難局で、もう一人の自分が客観的に自分を見守っているような状態を経験して以来、いつでも達観した



タレント清水國明さんの大手術を成功させ、鳥越俊太郎氏の取材を受ける三澤医師（左）。

境地でプレッシャーを克服できるようになりました。内視鏡手術普及前の多数の開腹手術、タレント清水國明さんの十二指腸乳頭部がんをはじめ、政治家や著名人の高難度手術の経験で培った、どのような状況に置かれようともゾーン（集中・没頭し最善のプレーができる状態）に入る強靱な精神力が功を奏したのです。

成熟した確かな技量、鋭敏な第六感

高い次元での五感と経験の融合Ⅱ第六感でオベのリスクを察知すると、患者さんとの対話で信頼を深め、不安を払拭します。確かな技量に甘んずることなく、術式の改良・標準化のため後進の指導・育成にも力を注ぐ、徹底した患者本位こ

そ三澤医師の真骨頂。腹腔鏡下手術は体へのダメージが少なく回復が早い低侵襲治療ですが、すい臓への施術は術野が狭く、より高い技量が求められます。三澤医師が日本の研究会代表を務める単孔式腹腔鏡下手術（おへそから全てを行う）は、手の動きが制限され時間はかかりませんが、手術痕が目立たない最先端の低侵襲治療です。その第一人者である三澤医師がゾーンに入ったオベ室は、ポジティブなオーラに満ちています。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶応義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート宣伝企画部、米国SPBC社New Design Conceptor（LA在住12年）、仙生露Executive PR Adviser、富士1ばんゴルフ副支配人/経営企画室長/広報室長を経て、2004年より現職。日米複数企業における広報・マーケティング経験から、難解な医療・健康をわかりやすくメディア・社会に伝えるべく、病院広報担当者間の勉強会「病院広報研究会」を立ち上げ、医療・健康コミュニケーション活動を研究中。趣味はゴルフ（Hdcp9）、ワイン（日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58）。